

船井情報科学振興財団 Funai Overseas Scholarship (FOS) 2013 年度生としてケンブリッジ大学キャベンディッシュ研究所 博士課程(PhD in Physics, Cavendish Laboratory, University of Cambridge)に留学中の篠原肇(しのはらはじめ)です。以下第8回 FOS 奨学生レポートとして、前回2016年6月の第7回レポート提出以降の進捗状況や現在の近況を報告します。

研究

早いもので、気が付いたらケンブリッジ大学の博士課程を始めて丸3年を過ぎ、4年目の生活が始まっている。現在では練習・試合やイベントなど他の用事があるとき以外はひたすら、実験と博士論文執筆にあてている。気分的には、どことなく受験の時と同じ雰囲気である。

つい最近、丸一年早い代にあたる先輩が博士論文を提出し、口頭試問を受けていた。しかしながら基準は結構厳しいようで、一部書き直しの要求があった様子。すでに先輩は働き始めているので、公式な卒業はまだ先になりそうである。これを受けて、さらに気を引き締めて頑張りたいところである。また、学位取得後後何をするかというのも大事だが、まずは学位を確実に取得することが先決であると感じている。近況報告としては以上だが、以下具体的に見ていきたい。



写真1 パンフレットに研究紹介が掲載



写真2 実験室で行われるプロモーションビデオの撮影

前回のレポート以降、新たに共著の論文が何本か出版された。船井情報科学振興財団への謝辞入りである。うち1本は、とあるアワードにノミネートされているという連絡があった。私は論文内の数あるうちの1つの実験と解析を手伝っただけにすぎないが、これも結果が出たら、報告したい。

私は、船井情報科学振興財団のほかに、ケンブリッジ大学の Winton Programme for the physics of sustainability の Winton Scholar でもある。このプログラムでは毎年開催されるシンポジウムに合わせ、レポートが出版される。今年のレポートに、私の研究のことが少しだが掲載された(写真1)。このほかにも、このプログラムのプロモーションビデオの撮影をプロの撮影者の方と行ったり(写真2)など、少々変わった経験をしている。所属するマクスウェルセンターのプロモにも、私が白衣を着て実験をしている様子が利用されている。

国際会議 Highly Frustrated Magnetism Taiwan

台湾で行われた、物性物理学の中でも特にフラストレーション系物質に関する国際会議「International Conference on Highly Frustrated Magnetism HFM2016」へ参加した。今回はポスターでの発表で、一度行って見たかった布のポスターでの印刷を行った。布のポスターは髪のパスターと異なり、折り畳むことができるため持ち運びに便利である。ただし、今回初めて使ったのが、布のポスターは折り目がつく。折り目があっても構わない人はそれで問題はないが、折り目が気になる人は、アイロンがけをする必要がある。ポスターを持ちながら、アイロンを借りる時に、ホテルの方から奇妙な目で見られたのは言うまでもない。

今回私は、グループからは単独で参加した。このこともあってなるべく世界各国から集まる同業者や共同研究者と交流を

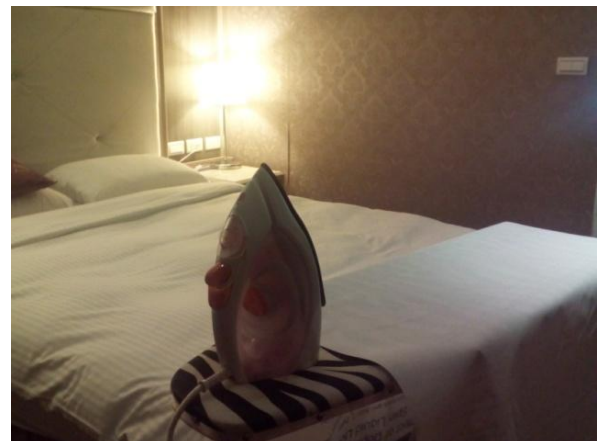


写真3 ホテルの一室でアイロンがけ



写真 4 国際会議での会食

図ろうと、コーヒープレイクや晩餐会ではもちろんのこと、昼食は、毎回違うグループの人たちととることになった。ある日に至っては、他の研究者たちと日付が変わる時間近くまで飲みに行ったりもした。イスラム系の人々とハラール料理のレストランにも出向いた。

多様なバックグラウンドの人々と英語で初対面の人たちとざっくばらんに話す能力は、ケンブリッジ大学でのディナーやイベントに日常的に参加していた際に自然に身につけていた。学内のナイトクラブの経験ですら有効であった。いつの間にか身につけたこの能力は非常に役立つ印象である。

台湾は地理的に日本に近い関係で、日本人も多く参加していた。私もコーヒープレイクなどで日本人集団に話しかけようと試みたが、スーッと消えてしまった。「私が何か悪いことをしたか？」と思っていたが、そうではないことを願っていた。

してなるべく英語で話そうとするなどの理由で避けていたわけではないが、皮肉にも一番交流が難しかったのは日本人であった。確かに発表実績としてみると、ただポスターを貼って誰とも交流を図らなかった場合と、なるべく多くの人と交流を持った場合は、全く変わらず、履歴書上の 1 行である。しかし中身が全く異なる。私が考えることではないだろうが、日本は大丈夫なのだろうか、と少々心配になった。

在英日本大使館での会議 JSPS London Research Promotion Conference

ロンドンにある在英日本大使館で行われた、日本学術振興会(JSPS)主催の日英の異分野交流のシンポジウム「JSPS London Research Promotion Conference」に登壇した。異分野の交流と、日本とイギリスの分野を超えた共同研究の促進が主な目的のようであった。これも、大学のアウトリーチのプレゼン大会の経験や、普段から哲学や文学など社会科学系の同僚に物性物理を説明している経験が役に立った。世界とは狭いもので、知り合いの知り合いという人が結構いた。

ARM の国際会議

ソフトバンクが買収したことで知られる ARM が主催するシンポジウムでポスター発表を行った。会場は私のオフィスがある建物の 1 階。非常に参加しやすい環境であった。興味があるセッションにだけ出席ができた。完全に「ホーム」での開催というのは、気分的にも楽なものであった。

途上国開発

前回のレポート以降にも、途上国の持続可能開発経験者として何度か発表の依頼(有料)を受け、実際に発表を行った。特に実際に水質調査装置やキットを作製している側からすれば、実際にタンザニアのスラムで水質調査経験がある材料専攻の人の意見は参考になるらしい。元々は同じプロジェクトのメンバーだった人々が、新しく何かをやり始めているという話をよく聞くようになった。担当したグループの 1 つは実際にタンザニアへ出向いていた。

「ひどく誇張した言い方をすると『グローバルプロジェクトを統括しているケンブリッジ大学の NGO からの招待講演依頼を受けた』ことになりますね！」と冗談交じりで言っていたが、「まさしくその通りであるし、推薦状などが必要な場合は遠慮せずにいってほしい」という返事が返ってきて、なんとなく出世した気分が味わえた。ただし現状では地位に変化はなく、結局は気分だけなので、今後も日々向上を図りたい所である。

研究所の引っ越しに続き、自分の家の引っ越し

前回は実験室とオフィスの引っ越しをしたが、今回は部屋の引っ越しをした。ケンブリッジ大学はカレッジにもよるが、ジーザスカレッジでは、カレッジ内の建物への居住は契約上は最長が 3 年で、それ以上になると学外へ追い出される。ただ幸運なことに部屋が空いていたので、部屋を移った。オフィスの引っ越し同様、100 メートルほどの移動となった。学内での引っ越しなんてこんなもんか、という感じである。ただ、それでも何往復もしなければならなかった。新しい家の共有スペースの掃除担当の人は、部屋のごみ箱を共有スペースのごみ箱の隣に置いておいたら、私のゴミ箱ごと捨てられてしまったり、炊飯器が知らぬ間に捨てられていたり、予想外のことをされている。何かと気を利かせて網戸まで掃除してくれるような、契約結婚をしてしまう、家事代行の人がうらやましい限りである。

総じて自分から申し込むよりも、参加を打診されたり、招待される機会が増えてきた印象である。この調子で日々精進していきたい。

スポーツ

コーフボール

コーフボールは夏のシーズンには屋外の芝生の上で大会が行われることが多い。私はイギリス東部で行われた **Didcot Tournament** に参加した。参加チームは全 12 チーム。個人的には、全力では取り組むものの、どんな状態なのかが経験できれば良いと考えていたが、結果として初出場・フル出場して優勝してしまった。よって、ひょんなことからタイトルを獲得した。残念ながらメダルや楯はなかった。



写真 5 オランダの方々



写真 6 コーフボール試合中

夏季ケンブリッジ地方のリーグでは個人総合得点ランキングで 58 人中 3 位と、こちらでも 3 位入賞することができた。表彰時はブロンズと呼ばれていたもので、一応「メダル獲得というところか。ただ有形のメダルはなかった。いつになったらメダルを獲得できるのだろう。」

シーズン明け、毎年恒例のオランダでの国際大会に出場。全体的にレクリエーション要素の強い大会で、終わってからはバーベキューやナイトクラブがあった。試合の最中に観客にアピールしていたら、**SHINOHARA** コールをもらったり、試合後にユニフォームの交換を求められたり、記念撮影(写真 5)を求められたりなど、あたかも有名選手になったような気分であった。それにしても、オランダ人は背が高い。

現在では 10 月から大学も新シーズンが始まり、スターティングメンバーかつフリーパス(フリーキック相当)を任されている。昨年は全英大会(イギリスインカレ)優勝候補にあがりながらも、結果的に 6 位とふるわなかったのも、今年こそは表彰台を目指したい。よく考えると、試合中の写真を奨学生レポートに書いたことがなかった

ので、貼っておくことにする。(写真 6)(この直後シュートを外した。)

ネットボール

こちららも気づいたら、中心人物の 1 人になっていた。前年までの主力が卒業などで抜けてしまった関係で、戦力は低下している。学期中に週に練習と試合で計 2 時間ほど。もはや行くだけでありがたがられるようになった。

上記 2 競技でプレイヤーオブザマッチ(PLAYER OF THE MATCH, 最優秀選手)を何度か受賞した。大きい大会や試合ではないので、もちろんメダルや楯はない。

ソーシャル

学内のイベントも 4 年目。もはや「前はどうだったの？今年のは例年に比べるとどう？」と聞かれる立場になっている。

ハロウィン

こちららのハロウィンは仮装が非常に入念であるということは前回までのレポートで言及した。では、今回は念を入れて仮装をしようと思い、真剣にウィッチの女装をした(写真 7)。日本の 100 円ショップに相当する 1 ポンドショップ **Poundland** で化粧品を購入し、動画を見ながら化粧を行った。なお、口周りは化粧が非常に難しかったので、マスクで隠すことにした。ただ、個人的な興味と探求心でやっていただけだが、結果としてベストドレッサー賞を受賞してしまった。副賞はディナーチケット。実際には私よりもっと気合の入った全身ペイントのコープスブライドなど多々いた関係で、自分が受賞するとは思ってもみなかった。友人に話しかけても、気付かれずにスパイになった気分であった。こちらの人平均身長が高い関係で、気付かれにくかったのだろう。



写真 7 仮装魔女コスチューム

クリスマス

毎年恒例のように様々なコミュニティでクリスマスパーティが開催される。メニューは主にターキーとクリスマスプディングである。カレッジのクリスマスディナーは今回で 4 回目。もはや恒例行事である。今回は前年と異なり、コーラス隊がクリスマスキャロルを合唱していた。



物性物理の研究グループのディナーでは、偶然にも壁にアイザックニュートンの肖像画がかかっているトリニティカレッジの一室で行われた。彼はトリニティカレッジの卒業生である。なんともアイザックニュートン「先生」と同席している気分であった。今年のクリスマスは、カレッジマスターから招待いただき、過ごした。

こちらでは、Sir が付くなど、どんなに高名な教授であっても、同僚であればファーストネームや、ニックネームで呼び合う。もしアイザックニュートンが現役であれば、「アイザック」、少し言いにくいので「ザック」と呼んでもいいのだろうか？と少し考えてしまった。

写真 8 クリスマスディナーの際のアイザックニュートンの肖像画

デジタルクリエイター

ブログをはじめとしたウェブ経験が発展し、今ではいくつかのウェブサイトの構築・運営を行っている。所有しているサイトのうちの英語版のサイトを応募してみたところ、Cambridgeshare Digital Award 2016 のファイナリストとなり、デジタルクリエイターとしてレセプションに招待いただいた(写真 9)。会場の雰囲気はエンタメ要素が強く、学術会議とは全く異なっていた。会場で話していた限りでは、プロのウェブデザイナーや企業のエントリーが大半であった。素人が趣味で応募しているのは残念ながら、プレート(メダル相当)には到達できなかった。上記スポーツの項目に次いで、「またしても・・・。」というのが正直な感想である。

その運営しているサイトのひとつがこちら。日本代表倶楽部(all-japan.club)。日本のスポーツ界、特に無名な競技では、一部の大人気競技を除き、資金がなく日本代表でも調達が難しいことが長年の問題となっている。また分野の特性上、途上国開発のように、外部に頼るのは難しい。よって自分たちでどうにかする必然性がある。この状況をまとめると、「全くと言っていいほどお金をかけずに、市場を再生・新規開拓することができるか？」という問いに対し「持続可能性と BOP ビジネスの考えと、ウェブの経験を生かすことで、可能なのではないか？」という仮説を立てた。とある物理学者が「仮説は実証してはじめて確かなものになる」と言っていることで分かるように、仮説には実証が必要である。

よって構築したこのサイトは日本代表に広く関係すれば無料で宣伝ができる。得られた広告収益はすべて本サイトの宣伝に再投資している。よって書けば書くほど、雪玉を坂から転がすように影響力が上がっていき、全体の利益につながる。どこでサチュレーション(飽和)が起こるかなど、細かな制約はわからない。しかし現在では順調に成長しているため、この仮説は現時点では正しいといえそうである。どう転んでも「実に面白い」と言えそうである。このモデルが有効であることが示せれば、スポーツのみならず、様々な状況・業界で応用ができるのではないかと考えている。本業ではないものの、FOS 採用時にいただいた賞状に書かれていた「将来わが国の情報科学技術分野でのリーダーとなられること」という意味では、わずかながら応えられているのではないだろうか。とはいっても、FOS の採用理由は物性物理の分野であるので、こちらでも成果を上げたいと切に思う限りである。



写真 9 デジタルアワード旗

ライター

本船井情報科学振興財団 FOS 奨学生レポートを機に始めたブログ(www.hajime77.com)のアクセス数も増え、認知度が上がってきた。ブログの知名度向上に伴い、個別のスポンサーがつくに至った。

上記日本代表倶楽部創始者やブログのスポーツやその戦略記事の影響で、大手メディア「ハフィントンポスト」へ寄稿・連載をさせていただくようになった(<http://www.huffingtonpost.jp/hajime-shinohara/>)。プロフィールには、「船井情報科学振興財団 FOS 奨学生」の所属を記入した。

終わりに

今回、船井情報科学振興財団 FOS 奨学生としての期間が終わり、初めてのレポートとなった。これを機に入學直後の丸 3 年前のレポートを見ながら現在と比較すると、変わった部分も多々見受けられる。総じて、最近取り組んでいたこと多方面で表彰をされたりと、地道ではあるが成果が上がっている。

繰り返し言及させていただいておりますが、このような多岐にわたる経験を積ませただけでいることは、ひとえに船井情報科学振興財団による多大な支援があつてのものです。支えていただける環境に感謝し、今後も日々精進いたします。